リサーチ報告座談会 2023/9/1 Fri. 14:00-15:30

今回のプロジェクトに参加した学生は両大学合わせて 32 名。そのほとんどが尼崎という名前は聞いたことはあるが、実際に訪れたことのある学生は少なく、大阪だと思っていたという声やテレビで見聞きした漠然としたイメージを持つ学生が多かった。

改めて、今回制作した作品の紹介に加えて、リサーチ前の率直な尼崎のイメージと実際に尼崎（寺町）を歩き触れて感じた印象、そしてそこから何を考えて作品制作に取り組んだのか、プロジェクトの振り返りとして両大学の学生たちと教員の林勇気氏、後藤哲也氏とともにリサーチ報告座談会を行った。

後藤哲也さん（以下：後藤）　通常こういったプロジェクトは一般大学でももちろんあり得ますが、制作系の作品展示をする場合は大体美術大学に声がかかることが多いかなという印象があります。なので、いわゆる総合大学の中の制作系の学科を持つ追手門学院大学さんと近畿大学にお声がけがあったことが、まず一つ面白いなというところと、もう一つは 2 つのゼミ、2 人の教員が関わって取り組むこともあまりないかなと思います。これが簡単なようで結構難しいというか、上手くいかないケースだったり、もしくはめちゃくちゃうまくはまるケースもあるとは思いますが。なかなか面白い試みを企画として出されたなというのが前提としてあります。林先生とは長くお付き合いはありますが、このプロジェクトに関してはそれぞれで進めてきましたので、最初に林先生の方から、プロジェクトに取り組まれるところからどういうアプローチでこのプロジェクトを進めてきたのか、ご説明いただいてから学生さんのお話しを伺えたらなと思います。

林勇気さん（以下：林）　授業で学生さん達は作品を作る練習とかはしていたのですが、自分達で一から何かを調べて企画をして作品を作るという経験自体が初めてだったので、最初はどうしようかなと思っていました。3 年生のゼミで参加することになって初回の授業の時にこのプロジェクトをやりますという話をして、ゼミではグループワークで作品を作ってもらったりすることがこれまでも多かったので、グループ分けをするところから始めましたが、僕もまだそれほどみんなのことを知らなかったので、最初に自己紹介のプレゼンをしてもらいました。そのプレゼンを見て誰と誰を組み合わせたらいいのかみたいなことを、かなり考えてグループ分けをしました。最初から知り合いの学生さん達が何人かいたみたいですけど、それは出来るだけ分けて比較的知らなさそうな学生さん同士で上手くいきそうな組み合わせ方を考えました。その後すぐ尼崎に来て、まず街歩きをして調査をしてもらって、1 グループから 3 案ずつぐらい出してもらいました。その中で各グループと話をして、3 班が被らなさそうな内容で調整をして制作を進めていくというようなプロセスで、今回 3 つのグループでそれぞれ作品を作りました。

それでは各班からどういうプロセスで制作を進めたのか説明してもらいたいと思います。

自転車班　ROOM1 の部屋に展示している自転車の映像を制作した自転車班です。

林　最初尼崎の街に来て気になったことをきっかけにして作品が出来ていったと思います。どういう所が気になってこういう作品を企画しましたか？

自転車班　まず下見に来た時に街の中に自転車が多いなと思いました。道も舗装されていて、真っ直ぐな道や平らな道が多くてきれいだったので、自転車のある風景とか街の映像を撮りたいなと考えて、自転車に着目して動画を作ることになりました。そこから映像としてどう撮ろうかとなったときに、街として明るいイメージがあったので、キャッチーな動画がいいなということで、ストップモーションを使うことにしました。

林　映像の中で花も出てきたけど、あれはどういう発想から？

自転車班　最初にリサーチで住宅街を歩いた時に花の量が多い印象を受けて、そこから花を使った映像を撮りたいなというイメージがあって。自転車にかごがあるので、そこに花を入れて撮影しようという形でこうなりました。

林　撮影はかなり大変だったと思うけど、苦労話とかありますか？

自転車班　動画に出てくるシーンの中で、花が浮いている映像も撮っていて。ストップモーションなので、みんなで協力しながら花を落とした瞬間に写真を撮る工程を何度も繰り返して調整しました。ストップモーションなので一定の間隔で撮らないとスピード感や見え方が変わってくるので、その幅とかを調整しながら撮るのに結構苦戦しました。

林　展示してみてどうでした？

自転車班　作品を観ていただいている様子とかを見ていたのですが、自分たちのイメージとしては「自転車に乗っている自分」として観ていただきたいなと思っていて。多分誰も乗られていないと思うので、また時間があるときに自転車に乗って観てもらえたら、目線も変わったり横と比較していただいたりすると面白い映像になるのかなと思いました。

後藤　台の上に自転車があるから乗ってはいけないのかなという感じもありますね。展示らしさが強くなっているけど、距離を感じさせるというか。一つ、林先生から聞いていて、そのこだわりが面白いなと思っての質問ですけど、自転車が新車じゃないといけないというこだわりがあったと聞いて。それはどういう理由ですか？

自転車班　みなさんが乗るので、綺麗な方がいいかなと思ったのと、希望の色が新車に多くあったというのもあります。

後藤　カスタマイズをした自転車が良かった？

自転車班　そうですね。かごもつけたりとか、片足立ちだと乗りにくいかなというところも考えて、スタンド型に変えていたりしています。

後藤　もう一つ質問ですけど、どのぐらいの日数尼崎に通って撮影されましたか？結構時間がかかったと思いますが。

自転車班　日数的には、１週間ごととかに撮影に行っていたので、期間的には２ヶ月くらいですけど、日数的には２週間くらいは制作に来ていると思います。最初はストーリーを決めるところで手こずったので、３日間ぐらいはずっと話し合っていました。

林　では、次にインタビュー班お願いします。

インタビュー班　自転車班と同じ ROOM1 で展示している、《人×尼崎》というインタビューの作品を制作したインタビュー班です。私達は、今まで尼崎に来たことがなくて、漠然と芸能人の人達のイメージから、そんなに人に温かい雰囲気あるのかな？って少し疑問に思っていたところがあって。けど実際訪れてみると、めちゃくちゃフレンドリーに話しかけてくれる人が多かったり、予想通りそのまま面白い人たちが多いなと思いました。それから人に焦点を当てて、寺町で作品を作ることになりました。尼崎に一度も来たことがない私たち３人のインタビューと交互に、尼崎に縁のある人たちを並べることで、より一層ギャップを感じてもらえるといいなと思って、インタビューを交互に再生するように工夫もしてみました。

林　やってみてどうでしたか？

インタビュー班　自分たちで撮り合ったインタビューでは、同じ条件なのに全然違った意見や感じ方をしていたので、３人それぞれのインタビューがあって良かったなって思いますし、尼崎の方々のインタビューを聞いてみて、より深い部分まで知ることができたというのもあって、温かさを感じるインタビューが出来たなと思います。

林　インタビューにご協力いただいた方々が公共の施設で働かれている方であったりとかお寺の方だったり、公共性みたいなものが強くあったので、そこに自分たちの尼崎の印象との差が出ているのかなと思いますが、その違いみたいなものは何か感じましたか？

インタビュー班　シンプルにめっちゃ好きなんやなっていうことが伝わってくるぐらいに、たくさん尼崎について語ってくださいました、皆さん。熱量がすごいです。

後藤　展示の形式がすごくかっこいいなと。スクリーンでインタビューに答えている人の映像が流れながら、その人の撮影した写真が光に当たって強調される。もちろん林先生のアドバイスもあったと思いますが、あの展示方法はどんな感じで決まったのですか？

インタビュー班　自分たちの案もいくつかあったのですが、でもそれが A-LAB で展示したときに本当に見えやすいのか、よく考えました。自分たちの背丈だけじゃなくて、小さな子も来るかもしれないという話もあったので、あまり高いところに写真を配置してしまうと見えないなとか、じっくり試行錯誤しながら展示として見やすいものがこの形かなという風に決めていきました。

後藤　映像を中心にしたゼミだと思うので、インタビュー映像は、アイデアとしてはストレートだと思うのですが、ただ実際にやってみると面白いなと思います。真摯に面白くまとまっていると思います。

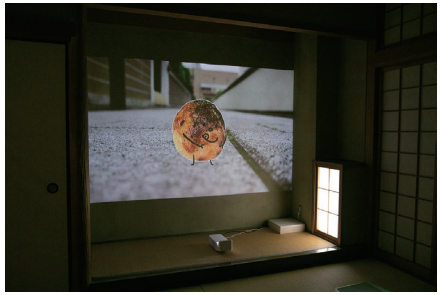
林　苦労したことは？

インタビュー班　一番最初がどう動けばいいか分からなくて。人を決めるのも苦労したし、この人にインタビューしてみたいなって思っても、その人が出演 NG だったりとか話せる自信がないとかで難しかったりしたのが苦労したことです。職員の方々にも手伝っていただきながら、自分たちでアポ取りはしないといけないなってことで、電話越しになってしまいましたが、企画の説明をしたりとか作品の内容を説明したりとか。そういうことを初めて経験したので力になったと思いますけど、最初はかなり苦労しました。

林　最後にたこやき班お願いします。

たこやき班　私たちは和室で展示をしています、《たこやき脱走事件 !》を制作しました。たこやき班です。私たちの最初の尼崎のイメージは、先ほどの話にもあったと思いますが、芸能人の方のイメージから、「にぎやか」というイメージがあって、実際に訪れてからもそのイメージは変わらなかったのですが、寺町という場所があることを知らなかったので、綺麗な街という印象も加わりました。一番最初に寺町を訪れた時に、「たこ焼き 岡」というたこやき屋さんを見つけました。その店主の方がすごく温かくて、お値段もリーズナブルで尼崎の方にすごく愛されているお店なんだなという風に感じたことから、たこやきに焦点を当てた作品を作りました。

　最初はたこやきを合成かＣＧのどちらで合わせるか



ということで悩んでいました。３人ともＣＧも合成もやったことがなくて、どっちのほうが上手く作ることができるだろうとかいろいろ考えていて。結局は合成で制作することにしたのですが、合成のやり方を一から勉強してそこから初めて作っていく感じだったので、誰も最初分からない状況で、先生にも教えていただきながら作ったことがいい経験にもなったし、作品としても合成を使って良かったなと感じました。

　作っていて難しいなと思ったことは、たこやきが映像の中で動いていくその動きをどう表現すればもっと伝わりやすくなるだろうとか、表情も手描きで描いていますが、その表情の動きとかがどうやったらもっとコミカルにできるのか、そういう所がすごく難しかったです。けど最後作品になったときはすごく達成感もありましたし、やって良かったなって思いました。

林　自分が描いた絵が動く経験は多分初めてだったと思うけど、動いたときとかどんな風に感じましたか？

たこやき班　描いているときは大変だなというのが一番思ったことですけど、動いているところを見たら、可愛く出来たなとか面白く出来たなって達成感がすごくあるなと思いました。

後藤　中間報告会の際にも話したかもしれないですけど、ここにおられる 40 代後半以降の方とかは、みんなが思い浮かべるのかなと思いますが、『およげ！たいやきくん』という歌が昔あって。でもそれは知らなかったんですよね。焼かれているものが逃げていくのがまさにおよげ！たいやきくんだなと思ったけど、その着想はどういうアイデアで決まったのでしょうか？めちゃくちゃフレンドリーな人がやっているたこやき屋さんなのに、なんでたこやきは逃げるのだろうと思って。食べられるのが嫌なのかなと思ったけど、それがまた延々とループして和室で流れているのが無間地獄みたいにも見えて。どういう発想でストーリーが作られたのか気になりました。

たこやき班　たこやきはいろいろな場所を逃げているのですが、尼崎のいろいろな場所を案内しているという風に捉えてもらえたらいいなと考えていました。

後藤　食べられるのが嫌じゃなくて、世界を見たいなって感じで見せてくれているってことですね。ありがとうございます。

林先生の追手門学院大学さんは３年生の新年度から生まれたばかりのゼミということでしたが、私の方が３年生のゼミだけではなくて、４年生のゼミの有志の学生と２年生のプロジェクト演習という授業が大学にありまして、その中でも今回取り組もうということになりました。なので、2、3、４年生の合同で進んでいるという感じです。

進め方としてはまず最初に、大学が地域に関わって何かを再発見するとか、新しい物を作るようなプロジェクトをいくつか紹介して、こういうプロジェクトを大学ではやっているよねということを前提の知識として持ってもらいました。その上で編集者の方に来てもらって、まず身近な所でリハーサルをやってみようということで、近畿大学内で自分たちが気付いていなかった大学のことを発見して冊子を作るというワークショップを一度行いました。その後尼崎を巡ってそれぞれのアイデアをまとめてもらいました。

ただゼミとは違うので、林先生のようにこの学生とこの学生が組んだら良いかもしれないというようなことは、私の方ではやっていなくて。基本的にアイデアベース、みんなから出たアイデアをまとめていってグループを作っていく、あるいは最終的に一人で制作に取り組んだ学生もいます。

林　知らない人同士でグループになっていたりもしているのですか？

後藤　ぬいぐるみを作っている班があるのですが、その班は２年生から４年生が混ざったグループですね。他の班も大体１学年ぐらいは横断して混じっていたり、２年生だけのグループもあって、出来たのが５作品になります。

最初に今日来ている学生の制作作品から発表してもらって、それ以外に関しては私の方から簡単に紹介しようかなと思います。ではぬいぐるみ班からお願いします。

ぬいぐるみ班　倉庫で展示をしている《あまぐるみ》を制作したぬいぐるみ班です。個人のアイデアベースで似ている人が集まってグループを作ったという話がありましたが、もともとこの班は、尼崎のリサーチをしたときに見つけた草木のぬいぐるみ、尼崎の景色に擬態したカメレオン、デザインマンホールへの興味からマンホールを作品にしたいという、いろいろなアイデアがありました。

なのでマンホールと草木とカメレオンの３つのアイデアを、ぬいぐるみの括りで進めようという話でまとまって制作する形になりました。４人ともぬいぐるみを作った経験がない状態からのスタートだったので、複雑で難しい形にすると作ることが出来ないのではないかとか、技術面の問題もありつつリサーチで見つけた尼崎らしさを感じるものをモチーフに選んで形に起こしていったという感じです。最初は作り方も分からないし、カメレオンをぬいぐるみでどうやって作るのだろうというところから始まりました。

後藤　寺町の景色に擬態した生き物みたいなものが A-LAB に移ってきたみたいに、最初の展示案は A-LAB 館内の様々な場所にそれぞれのぬいぐるみが点在しているような。キャプションもつけずに何かいるなみたいな感じにしようかという話もしていました。山本君が制作してくれたゴミ袋のぬいぐるみは、尼崎のゴミ袋がこういう緑の市の指定のものがあるということを知らなかったので、最初は何を作っているのかなと思っていたのですが、ゴミ袋をこういった形で表現するというのは面白くて。ぬいぐるみを作ることは全然想定していなくて、普段僕が教えていることとは違っていたのですが、すごく自由な発想で造形的にも面白いなというのが感想です。

林　さっきの話にもありましたが、ぬいぐるみを作るのは初めての経験で、作るときに技術的にどうすればいいのか分からない、型紙もどうやって切ったらいいのかみたいな制作方法が分からないことも多かったと思いますが、どういう所で作り方を調べたんですか？

ぬいぐるみ班　作業自体はみんな各々で進めようという話になったのですが、何度か集まって作り方を共有したりとか、簡単なワークショップみたいことをやったりしながら、制作を進めていました。

後藤　岡田さんは廊下に展示されている《尼崎貯金箱化計画》という作品を一人で作ってくれました。

岡田さん（以下：岡田）　廊下の作品を制作した岡田です。着想のきっかけは「世界の貯金箱博物館」という施設があって、リサーチの時に訪れました。そこに行かれたことのある方は分かると思うんですけど、バリエーションが豊か過ぎるくらい貯金箱がたくさんあって、自分の中にある貯金箱ってこういうもんやんなっていうイメージが崩れました。そこから「何でも貯金箱にできるやん！」って考え始めたのがきっかけで、そのマインドのまま尼崎の街を見ていたら、この場所だったら何時間ぐらいなら貯金ができて、何円ぐらい貯金できるだろうなという妄想を作品にしました。

後藤　一人の制作は大変でしたか？教員から見た印象では、順調に進んでいたのかなと思ったけど、実際そうでもなかったですか？

岡田　リサーチをして結構アイデアも出ていて、発表のときにはある程度展示方法まで出来上がっていましたが、やっぱり一人は孤独でした（笑）

後藤　岡田さんの場合はしっかりコンセプトが固まっていたので、一緒に入る人も多分お手伝いする感じになりそうだったので、ある程度は一人で頑張ってもらおうかなと思ったら最後まで完成させてくれたという感じです。やってみた感想とかありますか？

岡田　作ってみて、アウトプットの方法がいつも学校でやっているような制作とは違ったなと思います。いつもは画面や印刷物のような平面の中でどう作っていくかということで制作しているのですが、今回空間の中で作品を作っていくということで、やっぱり作り方が違うなという気づきもあったし苦戦したところでもあったけど、やっぱり空間は空間で際限がないというか。床や建物の凹凸も全部使って展示したことは経験になったなと思います。

後藤　展示もある程度事前に考えていた分とその場で考えた部分が両方混ざってうまくやっているなという感じで。展示だけを見ると文章も面白いのでユニークな発想のアウトプットかなという風に思いがちですが、個人的には最初にどういう風に街をリサーチするか、視点をどう変えるかみたいなことを一度授業上

やったつもりだったけど、それを踏まえて貯金箱博物館に行ったら街がこういう風に見えてくる。それを一度冊子にする課題もしてもらったのですが、それも今展示しているようなことを冊子で作っていました。その冊子を最終的に空間化したという。こっちがこういうことを学んでやって欲しいなってことは全部上回る形でやってくれたので、一見ふざけているようにも見えますが、実は核心をついている作品かなと思って、そういう部分もまた注目して見ていただければと思います。

林　僕もあの作品を見たあとで街を歩いていると、街のものが貯金箱に見えてきました。これいくら貯まるだろうみたいな。それは後藤先生が授業でされていた視点を変えるみたいな所が上手く機能しているのかなと思って、面白いなと思いました。進めていく中で相談したこととかありましたか？

後藤　尼崎の市域の形を使って作った貯金箱を展示していて、これは学校の設備のレーザーカッターで作ることができるのですが、サイズが大きいので、どうやって作ったらいいですか？とか、構造自体も積層状に立体的に工夫しないといけないこととかを、こういう風にした方がいいのかなぐらいのアドバイスをしただけで、そこからは全部自分で頑張っていました。

林　モチーフが特別感のあるものじゃなくて何気ないものに結びつけているのもすごくいいなと思いました。

後藤　それでは他の作品は私から簡単に説明だけになりますが、入口の入った所にポスターが４枚あります。私の教えている部分がグラフィックデザインが中心なので、広報物もこちらで作ろうということになりました。３年生はまだアプリケーションにそこまで馴染んでいなかったということ、２年生はまだ使えない方が多いので４年生でやりましょうということで、４年生の有志で４案作ってもらったものをそのまま

お渡しして、関係職員の方、追手門学院大学のみなさんに投票をしてもらって、票の多かったアイデアにまとまったという感じです。他の案も面白いと思ったので、展示では全て見せようという理由と学生が主体的になって制作していることを示すためにも最初に全部見せようかなと考えました。

階段を上がってロビーの所には３班の作品があります。入ってすぐ左にあるのがグッズを作った班です。一昨年、オランダのデザイナー、StudioSpassがA-LABの新しいロゴを作って、そのお披露目展のような形で「ニューアイデンティティ」という展覧会を開催しました。そのときに今の４年生が新しいロゴを使ったグッズを作っていたこともあって、またそういうことがやりたいということが先にあったというのが正直なところです。作ってもいいけど寺町をリサーチした上で作りましょうということで制作をしました。Ｔシャツは売り物ではないのですが、寺町で見つけたビジュアル要素を刺繍しています。他には、寺町を巡った印象からポストカードやステッカーにしているものがあります。壁面の写真は、そのＴシャツ

を着て寺町に行き、雑誌のようなイメージで撮影したスナップ写真を展示しています。

屋台の展示は、これも屋台をやりたいという学生がいたので、屋台をまずどうするかということで、今回はNO ARCHITECTSさんという建築家の方からお借りしたものをベースにして、寺町に合うような屋根とか暖簾、賽銭箱を作りました。この屋台に先ほどの他の班のグッズやぬいぐるみを乗せて、展示の宣伝をしながら寺町を回ろうというのがコンセプトです。実際に寺町を回る様子を撮影した映像が屋台の上のモニターで流れているという感じです。

もう一つがポスターです。これは４年生の学生が作ったもので、書体にライト、レギュラー、ボールドのような、書体の太さに種類があるので、文字自体は、全部同じですが太さを変えて写真の密度も変えることで、書体見本兼文字見本のようなイメージで作ったポスターになります。

あとROOM3の五感の班ですね。２年生だけの７人の班です。この班がいわゆる作品っぽい作品を作ろうという意欲が強く、そのイメージを実現することが

なかなか大変でした。

この班は、五感チームと呼ばれているのですが、五感を活かしたような展示がやりたいということで、例えば部屋のとあるエリアに行くと尼崎のこのエリアのにおいがするとか。感性学という授業が大学にあって、その先生たちは香りの研究や実験もされているので、その先生たちからディフューザーなどを借りて、香りの再現もしようかみたいな話とか、触って感じられるような文字のオブジェのようなものも考えていました。このチームが一番いろいろなアイデアが出ていたのですが、それをどう現実化していくのかが一番大変で、実際こういう風にしようと決まっても実現する方法が分からなかったり、僕も分からなかったり。当初の案では３倍ぐらい大きなアクリルで、しかも角が丸くなっていなくて。それはちょっと危ないかもしれないから、こういう風にしたほうがいいよねみたいなことで徐々に変えていって、現場でも合わせながら調整したという感じです。プロの映像やインスタレーションと比べると稚拙な所もあると思うのですが、なかなか展示や制作の経験がない状態から学校の施設を使って、なんとか形になって、尼崎の外から見たイメージと中から見たイメージを空間で区切って展示をしていて、影で出てくる部分や、映像で流れる部分を工夫して展示しています。林先生にも大学に来てもらって映像のワークショップをしていただいたので、追手門と近大のコラボレーションでもあるし、学生がやったことのないことに挑戦することも実現できたかなという感じです。

近大の学生から一人ずつ、作品でも全体でもいいし、何か追手門学院さんの作品で思ったこととか感想とか質問とかあれば。

近大学生　和室のたこやきが逃げる作品で展示にブラウン管を使っていますが、それは何か意図がありますか？

たこやき班　和室で展示をすることが決まって、和室のイメージに合ったものを使いたいよねって話をしていて、じゃあブラウン管が合いそうだねって。

近大学生　たこやき班の作品を観ようと展示室に入ったときに最初にブラウン管の画面が見えて、暗い所でブラウン管だけが光っていて。そこだけかな？って周りを見渡して、特に展示も見えなくて、ブラウン管だけかと思って見ていたら映像が消えて、実は他の場所にスクリーンがあって、和室の中の３カ所に映像が順番に流れる。それがまるで部屋の中でたこやきを探し回っているような気分になるっていうのは面白いなと思いました。

たこやき班　和室一部屋を使って展示ができるので、せっかくならいろいろなところに展示ができたら面白いなと思ってこの形になりました。

近大学生　自転車の班は、一番尼崎の中を探検しているような気分になる作品だと思いました。インタビューの作品は住職の方のインタビューを見ていて、私自身尼崎が地元ですけど、家の近くのお寺で住職の方と喋ったりとか、夏休みにお寺に泊まるイベントが毎年あって小学生の頃とかは参加していました。住職の方がお話していた、「お寺は一見さんでも地元の人でも誰に対してもみんなに開く場所。」というお話が印象的で、自分の経験を思い出したり、温かさを作品を通して感じられました。

近大学生　映像の展示と聞くと、ずっと映像は流れ続けるので、ある意味観客が置いていかれるような感じのイメージがありました。けれど、みなさんのどの作品も空間に落として観客を繋いでくれる、それがすごく見やすかったです。そういうことはずっと１年生の時から勉強されてきた経験があって用いているのか、それとも先生と話し合ってできたのかお聞きしたいです。

自転車班　このゼミに入っている人たちは、１年から林先生の授業、嵐山に行って動画を撮ってみたりだとか、１つの商品をモチーフに簡易的なチラシを作ってみるというような授業を取っていますが、今回こういう映像作品というのは、先生と話し合って決めたところもあります。でも、自転車を実際に会場に置くとか、２画面で展示することは、私たちの班で話し合って絶対にやりたいとは言っていましたね。

インタビュー班　林先生の授業とか集中講義とかを取っていると、映像撮影とか作品を見せることに触れてきてはいるのですが、こんなにしっかり映像を編集するところまで作るようなことはなかったので、その点ではやっぱり先生と話し合って出来たこともあったし、案を出すという点では、３人もいるのでメンバー内で話し合ったりとか、それを近大のみなさんの前とか追手門の中でも発表する場があったので、そこで他の人達の意見とかも聞けたからこういう見せ方ができたのかなというのはあります。

後藤　学生間でもブラッシュアップできた？

インタビュー班　そうですね。

林　追手門の学生さんから近大さんの作品の感想とか質問を。

追手門学生　尼崎城が刺繍されたマンホールのぬいぐるみがありましたがあれはどうやって作るんですか？

ぬいぐるみ班　あれは学校にコンピュータで動かせる刺繍ミシンがあるので、データを作成して、布をセットして、ミシンで絵を描くことができます。Ｔシャツの刺繍も同じ機械で作っています。

追手門学生　尼崎をモチーフにすると聞いたとき、自分は映像かなって思いました。見やすいし、風景も伝えやすいかなと思って映像にしていたのですが、一度中間発表で、カメレオンって聞いたときに、映像にしても面白いなと思っていましたが、実物を見てみて、それもキャッチーで分かりやすくて面白いなと思いました。

追手門学生　感想からいいですか。先生の分野に偏りがちな気がしていたのですが、ぬいぐるみとか屋台とかのアイデアが出てきたのがすごいなと、見ていて楽しかったです。

後藤　そういう意味では、グラフィックデザインが中心のゼミですけど、ポスターばかりが並んでいてもあまり面白くないかなと思ったので、ポスターとかもありつつなにか他にも考えてみようかという流れからぬいぐるみとかが出てきたのはあるのかなと。それぞれがいいアウトプットの形を選択できればいいなと考えていたので、それがこういう結果になったのかなと思います。

追手門学生　私たちの班は、いかに身近に感じてもらえるようなものができるかを試行錯誤していたのですが、ぬいぐるみは見た瞬間に可愛いなって、引き寄せ

られる感じになって、しかも触れるし。尼崎の良さ、尼崎の身近さみたいなものが感じられました。

職員　寺町を回って撮影された自転車班にお尋ねしたいことがあります。拝見してすごく面白いなと。尼崎はおっしゃっていた通り、一家５人家族でも６台自転車があるような自転車の街です。その中でも寺町に比べて阪神尼崎駅の周辺はお店もたくさんあるけど道が狭かったり、ごちゃごちゃしているような場所もあったと思います。実際撮影するとき、ストップモーションで撮るのは時間もかかる地道な作業だったかと思いますが、撮影中のエピソードやご苦労されたこととかあれば教えてください。例えば、通りすがりの方に「何してんの？」とか聞かれなかったですか？

自転車班　阪神尼崎駅の前で撮影していて、撮り終わったときにおじいさんに「何してんの？」って。自転車を押しながら話しかけられたことがあって。そのままちょっとお話したりすることはありましたね。

職員　すごく見ていて楽しかったです。ありがとうございました。

職員　皆さんが今回尼崎に来られて、何が印象に残ったのかを聞いてみたいです。今パッと尼崎と聞いて何が思い浮かぶのかなと。今回プロジェクトの中で実際に尼崎を歩いてみて、花が多いことに気付いたとか、たこやき屋さんの印象が強いとかいろいろあるとは思うのですが、これが印象に残っているとか尼崎がこんなイメージになりましたというのがあれば、教えて貰いたいなと思います。

近大学生　寺町の周辺エリアだけの話になってしまうかもしれないですけど、もっと関西の濃い感じのイメージがあって。そういうエリアもあるとは思いますが、寺町のあたりはすごい長閑な穏やかなエリア、特に川沿いのところとかはすごく穏やかな場所だなと思います。

追手門学生　もともとイメージとしては、ほんまに関西やなっていうイメージがあって。正直めっちゃ言い方悪いですけど、なれなれしいぐらいのイメージ、一言で言えば。けど撮影してるうちにちょっとずつ声をかけてもらうと、なれなれしいというよりちょっとおせっかいに近いぐらいの良いイメージの方になったなと思いました。

追手門学生　深く関わったのがインタビューに参加してくれた本興寺の住職、尼信会館の館長、歴史博物館の学芸員さんだったので、その３人のイメージになりますが、みんな話が上手い。盛り上げ方が上手い、話の広げ方が上手くて、より尼崎を身近に感じられたなと思います。

追手門学生　尼崎に来るまではどんなところなのか全く想像できていなかったのですが、こうして来てみていろんな場所に撮影に回ってみて、なんかちょっと歩いただけで景色が変わるというか、寺町だったり商店街だったりころころ景色が変わるので、「尼崎」って一括りにはできなくて、いろいろな場所があることを知ることができました。

職員　お時間も近づいてきました。学生の皆さんにとって、今回制作をして展示をして、終わりということではなくて、多分これがまた次のステップへのきっかけに繋がっていくと思いますし、この企画自体もこれで終わりというわけではなくて、スタートした形になるのかなと思っています。今回寺町というエリアでリサーチを行って制作していただきましたが、これがまた２回目３回目、じゃあ今度はもっと北のエリアだとか、エリアを変えて続けていくことで、徐々に尼崎の全体像が見えて、新しい魅力がどんどんと立ち現れてくると思っていますので、この「RE:AMA」もまた今後も続けていけるように取り組んでいきたいなと思っています。これでリサーチ報告座談会を終わらせていただきます。ありがとうございました。